

トランプ大統領の圧力と抵抗のリスク

トランプ政権の減税法案は米上院で可決された。上院議長を兼ねる副大統領の票で何とか通った。反対に回った少数の与党共和党議員には、次期選挙で対立候補を立てるとトランプが脅し、今期限りで議員の引退を余儀なくされた者もいた。トランプの圧力は相当なものだ。特に米国内ではそうだ。政界だけに留まらない。ビジネス界は言うに及ばず、教育界にも手を伸ばす。既にアイビーリーグの大学の学長も数名辞任した。

海外でも最近ではトランプへのご機嫌取りが目立つ。NATOの事務局長やカナダの首相など、ちょっと前まで威勢が良かったが、トランプの前に出ると借りた猫のようだ。

昨日はFEDの議長パウエルまでもトランプの度重なる圧力の前にちょっと萎えてきたかと思った。ポルトガルで開かれたECBのフォーラムでの発言だ。トランプが執拗に要求する7月の利下げも可能性がないわけではないという言い回しをした。

前回彼は関税の影響が顕著になる6月と7月のインフレ率のデータを確認する前に政策金利変更の可能性は少ないと明確に示した。となれば利下げをするにせよ早くで9月のFOMCになる。

ただ彼は今回も関税のインフレへの影響を確認することの重要性を繰り返し、トランプ関税がなければ利下げはもっと円滑に進んだかもしれないとトランプの政策がネックになっていることも指摘した。

パウエル発言に対する金融市場の反応はあまりなく、年内利下げは9月から続けて0.25%ずつ3回の可能性を見ている。

それにしても少なくとも米国では表立ってトランプに反発するには自分のキャリアや富の全てあるいはかなりの部分を賭ける必要があるようだ。だからそうした人々はどんどん少なくなっている。イーロン・マスクは再びトランプ減税法案を批判したが、トランプ大統領は早速マスクの関係するビジネスの補助金をカットするつもりだ。マスクはまた詫びをいれ恭順を示すのか。

そんな中で米国のシンガーソングライターのブルース・スプリングスティーンは際立っている。80年代の楽曲「Born in the USA」がレーガン大統領の選挙キャンペーンに使われ、これに激しく抗議した。内容は米国批判の曲なのにタイトルで米国賛美の曲と誤解されたためだ。

その彼が今年5月の英国でのコンサートでトランプ大統領を無能と批判した。公衆の前でこれほどあからさまなトランプ批判はあまりない。トランプは直ちに反論したが、これまでのところブルースが怖気づいたという話は聞いていない。